

2019年7月21日 マルコによる福音書 1:40-45 説教 西田浩子牧師

印刷機に置かれた最初の本は聖書である。最初に印刷したのは、印刷の父と呼ばれているヨハネス・グーテンベルグである。印刷技術の広がりによって市民にも聖書が普及した。こうした時代の動きがルターの宗教改革につながっていった。

フランス皇帝ナポレオン1世は、「聖書の中には、他の不敬な歴史よりも、確かめた真正なしるしがある。」という言葉を残している。日本の昔話に出てくる神は、人間の手で作られながら、人間によい施しをし、人間と語る神として描かれていることが多い。しかしこの神は良い友達の類で、神という観念はあまりない。近代の神学者バルトが「人間は人間であって、神は神である」と語ったような、隔絶し、超越した存在という意識で捉えられたものではないのである。そこが日本人が宗教心に篤くても、神に従順する、ひれ伏すという類の信仰を持ち得ない理由なのかもしれない。

相対性理論を発表し、ノーベル物理学賞を受賞した、ドイツ生まれのユダヤ人であるアインシュタインは、「宗教のない科学は凶器であり、科学のない宗教は狂信である」と言った。

聖書はすべて、神の靈感を受けて書かれた誤りのない神の言葉である。それは実際に起きた歴史的な出来事を正確に記録し、その事実を通して神とその救いに関する不変の真理を教えている。

ここで、聖書を調べることについて、三つのことを挙げたい。まず第一は、その必要性について。私たちは、なぜ聖書を調べる必要があるのだろうか。それは、聖書を通して神の御心を知ることができるからである。第二は、ではどのように調べたら良いかである。使徒言行録17章11節に、「素直で」「熱心に御言葉を聞き」、「毎日聖書を調べた」とある。第三は、その結果である。聖書を調べることによってどのようなことが起こるのだろうか。多くの人たちが信仰に入るようになる。キリスト教信仰というのは、実に

この聖書に基づいた言葉と業の信仰だからである。マルコによる福音書 1 章 40-45 節は、重い皮膚病を患う一人の人物の物語である。マルコによる福音書には、ここに至るまでの間に悪霊に取りつかれた人の癒しの話、熱病を患う婦人を癒した話など、イエス・キリストが行った言葉と業の出来事について書かれていた。40 節「さて、重い皮膚病を患っている人が、イエスのところに来てひざまずいて願い、「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と言った」。重い皮膚病というのは、以前の訳では「らい病」と訳されており、また別の聖書では「ツアラアト」と言い、皮膚の疾患があった者と思われる。「ツアラアト」はヘブライ語である。福音書では「レプロス」という言葉でギリシア語。今日の聖書の箇所「重い皮膚病」も「レプロス」である。この「レプロス」は、英語では「レプロシー (leprosy)」で、現在のハンセン病の事を指す。「ツアラアト」を「ハンセン病」という意味で訳したということである。旧約聖書の規定には、この病が完全に治ったかどうかを判定するのは、神に仕える祭司の務めである。祭司は注意深く病状の回復を確かめた上で、病から清められたことを判断した。しかし、祭司自身はこの病気の治療方法を知っていたわけではなく、癒しの力があつたわけでもない。そのため、この人は今まで病気が癒されるために誰をも頼りとする事はできなかつたことであろう。まして、どこに行くにも「わたしは汚れた者、わたしは汚れた者」と呼ばわらなければならなかつたので、誰か人に近づくことさえできなかつたであろう（レビ記 13 : 45）。

当時のユダヤでは、重い皮膚病に冒された人は、汚れた者とされ、はじき出され、人に近づく時には、自ら「汚れている」と叫ぶことが求められていた。彼らの不幸は、単に当時治療が困難だとされていた病気にかかつた、というところにあるだけでなく、ユダヤ社会がその病気に与えた、いわば社会的な意味によって疎外されていたところにあつた。そして、その意味を作り出していたのは、宗教的な掟そのものだ

ったということである。この人が主イエスの前に姿を見せたことは、通常では考えられないことで、苦しみの大きさと主イエスに対する信頼の強さがあったということがわかる。重い皮膚病に罹った人たちは、律法の上で汚れたものとされ、もはや神殿や会堂での宗教儀式に参加することもできなかった。家族や社会にとってはもはや死んだも同然であった。唯一、「病気が去った」という祭司の宣言だけが共同体に戻ることを可能にしたのであった。他宗教の中で、例えば仏陀が病人を治したというようなことを聞いたことはないであろう。それは、仏陀の教えでは病気で苦しむということも煩悩のなせる業であり、病気であっても死であっても、そのようなことに拘泥し拘る心を超越することこそ、仏陀の悟りの境地だからである。イエス様は、町に入って行って神の言葉を伝え、病人に癒しを与える人として、多くの人々に迎えられるようになった。重い皮膚病を患っていたこの人は、ひざまずいて「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります。」と言った。ここで「御心ならば」と言っているが、この言葉は彼の行動と比較すると、多少の違和感を感じる。「御心ならば」と控えめに言ってはいるが、可能性は低いけれども少しだけは期待しておこうというような態度で、キリストの前に身を投げ出したのではなかった。ここに、期待はずれを恐れる信仰や祈りがあったのかもしれないが、期待なしには何も起きないのも事実である。重い皮膚病を患っていたこの人は、積極的にイエス・キリストに懇願している。律法の掟は、社会的拘束力のある規定であるが、彼はそれを無視し、違反してまで強行に行動している。「ひざまずいて」というのは、礼拝の姿勢を表している。主イエスへの強い信頼とともに、自分のように汚れた人間には、主イエスのご意志が向けられないのではとの思いもあったのであろう。41 節の「手を差し伸べて」と、主イエスとの間にあった距離は、彼のそのような不安や自分への蔑みが表れていた。41 節「イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ。「よろしい。清くなれ」とあるが、この「よろしい」という

のは、この人の言葉を受けて言っておられる言葉である。この人は「御心であれば」、つまり「あなたが欲しさえすれば」と言った。イエス様はそれを受けて「私は欲する。清くなれ」と言われた。それを新共同訳聖書は「よろしい」と訳している。「清くなれ」という言葉は、他の箇所言い方に代えると、「デーモンであるであるらい病よ、出ていけ」というようになるであろう。デーモンは英語で悪魔という意味の言葉である。この箇所を医学的な観点から見ると、いわゆるウイルスという目に見えない悪い細胞を殺すかあるいは取ってしまうかということになる。ウイルス (virus) というラテン語はそもそもデーモンという意味で、聖書に出てくる「デーモンよ、出ていけ」という言葉は、「ウイルスよ、出ていけ」ということになる。現代における医学の基礎といえるウイルスの存在が発見されたのが 19 世紀後半であるから、それ以前には、病気の原因は多くの場合デーモンの仕業であると考えられていた。41、42 節「イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい清くなれ」と言われると、たちまち重い皮膚病は去り、その人は清くなった」。「憐れむ」という言葉は、内臓が動かされるという意味の言葉である。彼の苦しみに、断腸の思いとなられたということである。「深く憐れむ」と聞くと、二つの言葉で成り立っているようにも見えるが、もともとは一つの言葉である。はらわたが痛む、内臓が痛むという意味のある言葉である。そのような激しい意味のある言葉を、この福音書は特別の意味を込めて用いた。また、古い聖書の写本の中に、憐れみという言葉が、怒るという言葉に置き換えられているものも多くある。イエス様のその溢れる愛が振る舞いとなって表れた。「手を伸ばして、彼に触れ」られた。彼は自分の汚れ故の惨めさで、イエス様に近づき、自らをあずけることができなかつたのであろう。イエス様が、意図的にこの男に近づいたかどうか、私たちには分からない。彼らは出会ったとき、二人きりだったようである。重い病を患っている彼は、「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と心を揺

さぶる嘆願によって信仰を表した。イエス様はためらうことなく彼に触れながら「清くなれ」と言ったのである。するとたちまちこの人は癒された。イエス様は、ユダヤ教の信仰に従ってモーセの律法に定めてある通り、祭司に体を見せるようにこの人に言った（レビ 14 章 2 - 32 節）。いくら癒されたとしてもそのまま村へ帰ると、その社会の一員として認めてもらえなかった。レビ記 13 章を見ると、祭司長が体に病があるか否かを判断する権限をもっているとのあるので、イエス様は彼を祭司長のところに行かせた。彼は祭司長のところへ行って身体の癒しを確認してもらってから、浄めの儀式を行ったと思われる。そして、祭司長から病気の完治が宣言されたので、彼は家族をはじめ村人に共同体の一員として受け入れられ、村人の一人として堂々と生きることができるようになった。ツアラアトは去ってこの人は清められたのである。マルコによる福音書 1 章 43-45 節「イエスはすぐにその人を立ち去らせようとし、厳しく注意して言われた。『だれにも、何も話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたものを清めのために献げて、人々に証明しなさい。』しかし、彼はそこを立ち去ると、大いにこの出来事を人々に告げ、言い広め始めた。それで、イエスはもはや公然と町に入ることができず、町の外の人のない所におられた。それでも、人々は四方からイエスのところへ集まって来た。」とある。これはレビ記に定めてある通りである。祭司が淨いと認めれば、この人は社会復帰し、家族のもとに帰ることができるのである。ところがこの元患者である人は、イエス様に「誰にも言わないように」と言われていたのに、喜びのあまり「大いにこの出来事を人々に告げ、言い広め始めた」とある。ここで「言い広める」と訳されているのが、「ケーリュツソー」というギリシャ語で、「宣教する」という意味である。つまり、宣教というのは、イエスに救われた人がその喜びを他の人に伝える、というのが基本だという事である。宣教においては、わざわざ「あなたは罪深いのですよ。悔い改めなさい」と人を貶める必要はなく、

解放されて自由になった人が、その喜びを人に伝えるということでありそれで良いのである。キリスト・イエスの導きに従う生き方が、私たちが願い求めている生き方である。それが信仰によって生きるということで、信仰によって生きることによって、人は誰でも全く生き方を変えられるということなのである。人間を見る目が変わられ、その結果、人間関係が変わってくる。信仰を根本として、人に接するようにならなければならないのである。そして、聖書の読み方が変わる、つまり聖書の読み方が知識を得るためのものではなくなるのである。信仰者として生きていくに際して、自分が主から務めを与えられている奉仕者であることをわきまえることができるようになるということである。奉仕者は、主から命じられたことをする。主の命令に従って、自分の賜物を発揮することを制御、管理できる僕こそが良い僕であり、大いに全体の益となるのである。

時代のパラダイムは、「大量生産・大量消費」から「豊かさの質の変化を追求すること」に移りつつある。聖書は一貫して、最初から神が共にいて下さる「貧しさ」にまことの豊かさと幸いを見ていた。人間には、縦と横の関係があるが、まず縦の関係が大切である。この縦の関係とは神と人との関係であり、横の関係は個人と個人の交わりで、社会性を現わしているのが十字架の形である。今日の聖書の汚れた者というのは、ただ横の関係、人間の中で衛生的に汚れた者という意味ではなく、縦の関係の、神との関連の「宗教的に汚れた者とされた」という意味でもある。横の関係で見ても、重い皮膚病の場合には、人に不快感を与えたからだろうと思われる。そしてそれ以上に、当時はそのような人に触れると、その病が伝染すると考えられていた。そのため、そのような病気にかかった人を自分たちの社会から隔離したい、自分たちの目に触れる所から遠ざけたかったのであろう。聖書を正しく読むとき、人は必ず聖書を通してキリストが教えようとされる真理を知ることができると言っている。それは、私たちに聖書を正しく理解させ

てくれるのは聖霊の力だからである。聖霊はキリストを正しく証ししてくださる。そのため、私たちが自分の思い込みや誤った前提を捨てて、正しい方法で聖書を読むとき、神は私たち一人一人に聖霊を遣わして、その真理を私たちに教えてくれると言っているのである。聖書における信仰は、聞くことであり、見ることであり、信じることである。